

時代と共に「つなげる」機能を 目的持って進化続ける

ゴードーソリューション(浜松市南区、斎木英夫社長)とシムックス(横浜市都築区、中島高英社長)は、モノのインターネット(IoT)という言葉が一般的になる前から、工場の効率化を図るシステムの提供をしてきた。当初から、顧客の抱える課題やニーズから、さまざまなものを「つなげる」構想はあった。時代と共に通信技術が発達したこと、構想段階だった機能は実現する。2つの企業の最新製品は、IoTを意識して新しい機能を付加したのではなく、従来品の改善を繰り返した結果、IoTに対応した機能を持った。目新しいキーワードや技術に飛びつくのではなく、課題解決などの明確な目的を持って進化を続けた製品がロングセラーになりえるようだ。

改善しながら半歩先を ゴードーソリューション

ゴードーソリューションの通信システム「Nazca Neo Linka(ナスカ・ネオ・リンク)」は、加工現場のIT化と工場マネジメントをコンセプトにしたものだ。IoTに対応し、パソコンからCAD/CAMなどのデータを機械に発信するだけでなく、機械状況などのデータを受け取れる双方の通信が可能になる。

リンクの前身となるナスカ通信は1997年に開発された。パソコンの普及が始まったころだ。それまでデータをフロッピーなどで機械へ読み込まっていたのを、パソコンから直接データを送れる



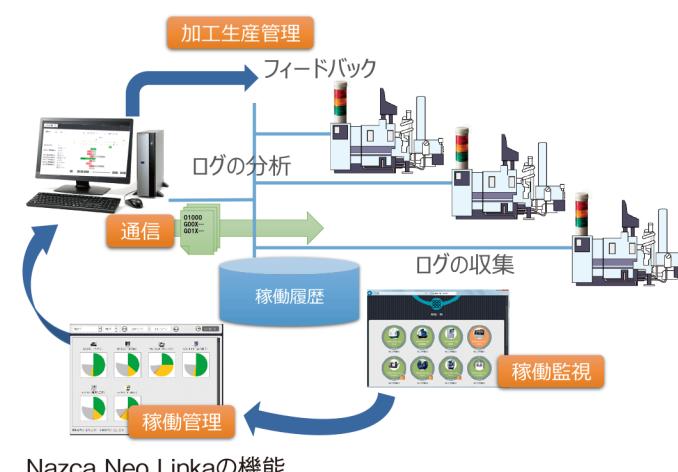
「半歩先を行き、今の製品に満足しない」と斎木英夫社長

ように作られた。その後、複数台の機械のデータを管理するためナスカ・マルチ通信や無線LANに対応した製品も誕生した。

IoTと言われる以前から、顧客の抱える現状の課題や期待される効果を見つけ出し、パソコンと機械の双方向の通信、さらには機械だけでなく工場全体のマネジメントを目標に掲げてきた。「大事なのは連続性のあるイノベーション(革新)。改善を繰り返すことで、時代の半歩先を行ける」と強調する。

顧客に寄り添い提供

リンクの特徴は新しい機械だけでなく、古い機械からでもデータを集められる点だ。ゴードーソ



リューションの顧客のほとんどが中小企業のため、古い機械を使用する所が多い。「IoT化を進めたいが、新しく設備を購入するのは厳しい」。そういった企業が気軽に始められるようにする。

また収集データの活用の仕方も、顧客の課題を元にされており、生産性を高めるための内容が多い。例えば、機械の異常をリアルタイムに発信。加工計画に対する進捗を表示するなど、すぐに改善につなげられる。

今年中には、新たに離れた場所からでもリアルタイムで加工シミュレーションが確認できるシステムを作る予定だ。さらに将来は、部品表を持たない中小企業向けに、生産管理ではなく工程や加工管理する、現場にあった管理システムの開発を目指す。「日本企業の99.7%を占める中小企業に寄り添った製品の提供をする」と斎木社長は意気込む。